

野菜栽培コースにおける研修の改善～海外と国内をつなぐ国際耕種の取組み＜その1＞

はじめに

JICA 筑波における研修の実施

これまで AAINews で紹介してきたように、国際耕種は 2001 年から JICA 筑波（JICA 筑波国際センター）において、野菜、畑作物、陸稲等の栽培技術に関する研修を、海外からの研修員を対象にして実施している。



キャベツの収穫～野菜栽培コース

これまで AAI が担当してきた野菜栽培コースは、灌漑、稲作、農業機械と並んで JICA 筑波の基幹コースの一つであり、野菜栽培に関する講義及び栽培実習、関連機関や農家の見学等からなる約 9 ヶ月間の研修が行われる。最近では栽培技術のみならず、普及手法やマーケティングに関する分野も重視されてきている。

野菜栽培と普及/マーケティング

研修員の職種は、農業普及員、研究員、大学の講師、NGO 職員等である。彼らの野菜栽培経験はさまざまであり、各国の事情や抱えている課題も異なることから、各研修員に対するきめ細かい対応が必要となる。

研修成果としては、研修員が帰国後に研修で学んだことをそれぞれの業務の中でどのように生かしていくかが重要であり、そういった観点から『技術普及と試験研究』というテーマが重視されている。

さらに作るだけでなく、売するための農業という視点も大切であり、市場ニーズの把握、流通販売システムの理解を含む、マーケティングに関する内容も視察や講義・実習を通して学ぶことが求められる。

海外の経験を国内の研修に活かす

この野菜栽培コースの中で、国際耕種社員が講師として、普及やマーケティングに関する講義・実習をいくつか担当している。JICA 筑波の研修に我々国際耕種が関わる際のもう一つの特徴は、「途上国での経験を研修業務に生かし、研修での経験を途上国での業務に生かす」ということである。

たとえば、海外で実施した普及プロジェクトの知見を基にして教材を作成し、研修員が帰国後に普及活動を実施する場合の参考になるような講義・実習を行っている。また、筑波の研修で経験した講義・実習の進め方やワークショップの実施方法、ファシリテーション手法等は、海外で同様の活動を行う時に応用できる。

それぞれの事例内容の紹介

本シリーズでは、JICA 筑波の野菜栽培コースで我々が講師として担当している以下のような講義・実習を事例としてあげ、その概要を紹介する。

項目（担当者）	概要
有用技術の現地適用と普及（財津）	普及員として求められる能力を CUDBAS ワークショップを通して研修員の間で共有する。農民のニーズに合った有用技術を効果的に普及させるために、五感や身体を活用した情報収集法、普及のためのマニュアル作成法、現地ですぐ活用可能な資源を活用した施肥改善技術等の講義・実習。
作物生産と灌漑（中山）	作物生産性向上に欠かせない灌漑技術の講義・実習。土壌物理や農業気象の基礎的知識、灌漑方法・灌漑効率の説明に加えて、灌漑スケジュールや CWR（作物要水量）、灌漑水路流量の推定に関する演習を行う。
灌漑技術の普及/普及のためのデータ収集・活用法（湖東）	作物生産への灌漑の効果や、灌漑が誘引する問題点、節水の必要性の紹介。シリアにおける節水灌漑技プロの事例紹介及び効果的な普及活動の計画・実施方法の講義・実習。普及のための基本的データの活用法や、データ収集のための農家調査法、調査票の作成法等に関する講義・実習。
マーケティング手法（古賀）	スーダン・パレスチナ技プロで実施したマーケティング事例について活動概要を紹介し、4P（Product, Price, Place, Promotion）のマーケティング・ツールの観点からグループ単位でカードをもちいて分類する演習。さらに、分類結果を研修員自らの経験・知見にもとづき分析をすすめ、技プロ活動に対して提言し、実践力・応用力を培う。